

日本人英語学習者による主語の習得について —中学生を対象とした調査から—

壺倉恵子*・縄田裕幸**

Keiko Tsubokura* and Hiroyuki Nawata**
On the Acquisition of the Subject by Japanese Learners of English:
A Survey of Junior High School Students

ABSTRACT

The purpose of this paper is to investigate the process of the acquisition of the English grammatical subject by Japanese learners of English (JLEs) within the theoretical framework of the Minimalist Program, especially the mechanism of feature-inheritance developed by Chomsky (2005, 2006) and Miyagawa (2005). In order to acquire the English-type subject, JLEs have to reset the relevant subject parameter in two steps: they first learn that the agreement feature percolates from C to T, and then, they recognize that unlike Japanese, the focus feature remains on C without percolating down to T. The result of the investigation with 673 junior high school students shows that it is relatively easy for JLEs to acquire the percolation of the agreement feature; on the other hand, they have difficulty in removing the option of the focus feature percolation. This explains why JLEs do not always succeed in resetting the subject parameter.

【キーワード：主語パラメーター，ミニマリストプログラム，素性継承，一致，焦点】

1. 序

生成文法に基づく第二言語習得研究では、これまで主語の習得に関して多くの議論がなされてきた。日本人の英語学習者 (Japanese learners of English: JLE) に関しては、英語では明示的主語が義務的であるのに対し、日本語では空主語が許されるという点が第二言語 (second language: L2) 習得上の問題となる。この言語間の違いは、原理・パラメーター理論以降の枠組みでは、当該言語のパラメーターの違いとして捉えられる (Chomsky (1981) の空主語パラメーター、Chomsky (1995) の強い D 素性など)。(1) に示したように、先行研究においては、このパラメーターの再設定が比較的容易であるという報告と、再設定が不可能、あるいは非常に困難であるという報告がある。

- (1) JLE による主語パラメーターの再設定
 - a. パラメーターの再設定が可能：
Hirakawa (2003), Wakabayashi (2002), Wakabayashi & Negishi (2003)
 - b. パラメーターの再設定が不可能：
Kuribara (2004)

したがって、JLE による主語パラメーターの再設定については、異なる 2 つの立場が並立していることになる。

本稿のねらいは、第一に中学生を調査対象にすることで、英語学習の初期段階における主語パラメーターの再設定が可能かどうかを検証し、JLE の初期の中間言語がどのようなものであるかを考察することである。第二に、Chomsky (2000) 以降の理論的枠組み、とりわけ Chomsky (2005, 2006) で提案されている素性継承の仕組みを援用することで、JLE の主語パラメーター再設定について新たな分析を試みることである。具体的には、素性継承を日本語タイプの言語にも適用して日英両言語の類型論的違いを捉えようとしている Miyagawa (2005) を理論的枠組みとして採用する。これによると、英語は一致素性が C から T に浸透して EPP 素性を機能させるのに対し、日本語は焦点素性が C から T に浸透して EPP 素性を機能させる。したがって Miyagawa の提案によれば、英語と日本語のパラメーターの違いは、C から T に浸透する素性の違いに帰着させることができる。

本稿では、JLE による主語パラメーターの再設定が、(2) に示した 2 段階で進行すると主張する。

- (2) a. 一致素性が T に浸透することを習得
- b. 焦点素性が T に浸透しないことを習得

(2a) が新たな特性の習得であるのに対し、(2b) は母語である日本語の特性を取り除く作業である。多くの JLE が主語の習得に困難を覚えるのは、日本語の特性を取り除く (2b) の過程が難しいためであると論じる。

* 島根大学大学院教育学研究科教科教育専攻英語教育専修

** 島根大学教育学部言語文化教育講座

本稿の構成は以下の通りである。まず、2節ではミニマリストプログラムを用いて JLE の主語の習得を分析している先行研究として Wakabayashi (2002) と Kuribara (2004) の概要を紹介する。3節では本稿で採用する理論的枠組みを導入する。4節では今回行った調査を報告し、考察を加える。最後に5節は結語である。

2. 先行研究

2.1. Wakabayashi (2002)

Wakabayashi (2002) は、L2 英語における義務的主語の習得の難易度が、学習者の母語 (first language: L1) によって影響を受けると論じている。具体的には、日本語母語話者の方がスペイン語母語話者よりも英語の義務的主語を容易に習得することを、読解速度と文法性判断テストによって示した (詳細については Wakabayashi (2002) を参照のこと)。

Wakabayashi はこの結果を Chomsky (1995) の理論的枠組みを用いて説明している。それによると、日本語タイプとスペイン語タイプの母語話者による習得の違いは、目標言語と母語の T が持つ素性の違いに起因する。目標言語である英語は T が強い名詞素性を持っているため、T は顕在的統語部門で句構造に導入され、主語は TP 指定部で発音される。被験者の母語に関しては、スペイン語は T が強い動詞素性を持っており、英語と同様、T は顕在的統語部門で句構造に導入される。ただし英語とは異なり、主語に相当するものは動詞の接辞として発音される。他方、日本語では T が持つ素性は弱いので T は顕在的統語部門で音形を持つ必要がなく、経済性の原理にしたがって陰在的統語部門で句構造に導入される。日本語の主語はそれ自身が音韻素性を持っているときのみ VP 指定部で発音され、主語が音韻素性を持っていない場合は発音されない。以上をまとめると (3) のようになる。

- (3) a. 英語: [strong D] → 主語は TP 指定部で発音
 b. スペイン語: [strong V] → 主語は動詞の接辞として発音
 c. 日本語: ————— → 主語は発音されなくてもよい

日本語母語話者とスペイン語母語話者では L1 が持つ T の素性が異なるため、L2 として英語を習得する際に、それぞれのタイプの学習者が習得しなければならないことが異なってくる。日本語母語話者は、T が持つ強い名詞素性を習得するだけでよい。それに対してスペイン語母語話者は、L1 から強い動詞素性が転移するので、まずそれを取り除いてから T が強い名詞素性を持つことを習得し直さなければならない。まとめると (4) のようになる。

- (4) Wakabayashi (2002): 異なる母語を持つ学習者が習得すべきこと
 a. 日本語母語話者: (i) 英語の T は強い D 素性を持つ
 b. スペイン語母語話者: (i) 英語の T は強い V 素性を持たない
 (ii) 英語の T は強い D 素性を持つ

第二言語習得においては、新しい規則を習得するよりも L1 にある規則を取り除く方が難しいと指摘されている (Schwartz & Sprouse (1994))。よって、スペイン語母語話者よりも日本語母語話者のほうが、英語の主語の習得が容易であるということになる。

ここから Wakabayashi は、JLE による主語パラメターの再設定が可能であると論じている。しかし Kuribara (2004) が指摘しているように、Wakabayashi による文法性判断テストにおける JLE の正答率は 50% 程度に留まっている。したがって、この調査結果が示しているのは、日本語母語話者がスペイン語母語話者に比べて英語の主語を習得しやすいということのみであり、JLE にとって主語パラメターの再設定が絶対的に容易であるということを示すものではない点に注意しなければならない。

2.2. Kuribara (2004)

Kuribara (2004) は JLE が習得したように見える英語の主語は日本語の「話題」であるという仮説に基づき、大学生を対象に文法性判断テストを実施して仮説の検証を行った。調査に使用された構文パターンは、様々な環境で空主語が現れる構文、および話題要素として解釈される DP が文頭に現れる構文の 2 種類である。Kuribara による調査の結果は次のようにまとめられる (詳細については Kuribara (2004) を参照されたい)。まず空主語構文については、英語母語話者が 90% 以上の割合で正しく排除することができたのに対し、JLE は上級のレベルでさえ、英語母語話者と同様の判断は不可能であった。また DP 話題構文については、初級・中級学習者の多くが、当該の構文を容認する傾向が認められた。ここから Kuribara は、JLE の中間言語においては日本語の話題構造が転移しており、JLE による主語パラメターの再設定は容易ではない、と結論付けている。まとめたのが (5) である。

- (5) Kuribara (2004):
 a. JLE が習得したように見える主語は、日本語の「話題」である。
 b. JLE による主語パラメターの再設定は不可能である。

しかし、Kuribara の分析にも問題点がないわけではない。それは、目標言語である英語の主語を正しく使いこなせている JLE が一定数存在しているという事実である。実際 Kuribara の調査においても、学習者の英語運用能力が初級・中級・上級と進むにつれて、英語の義務的主語を正しく判断できる割合も上昇しており、上級に分類された 15 名の被験者の

うち、約半数の7名は非文の空主語構文を正しく排除していた。ここから、習得が進んでいくにつれて何らかの変化が起きていることがうかがえるが、Kuribaraはこの事実を説明する具体的な仕組みについては触れていない。

WakabayashiとKuribaraの立場の違いは、結局のところ、事実のどの側面に注目するかの違いであるといえる。これは同時に、JLEによる英語の義務的主語の習得を単純なパラメターの再設定(例えば強いD素性の習得)に帰着させることの限界を示しているともいえる。そこで次の3節では、主語パラメターをより精緻に捉えるための理論的枠組みを導入する。

3. 理論的枠組み

本稿では、JLEによる英語の義務的主語の習得モデルを考察する枠組みとして、Chomsky (2005, 2006)で提案された素性継承理論を日本語タイプの言語に応用したMiyagawa (2005)を採用する。

まず議論の出発点として、Miyagawaはどの言語にも普遍的に同一の素性が備わっているという(6)の均一性原理(Chomsky (2001), Sigurðsson (2003))を採用している。

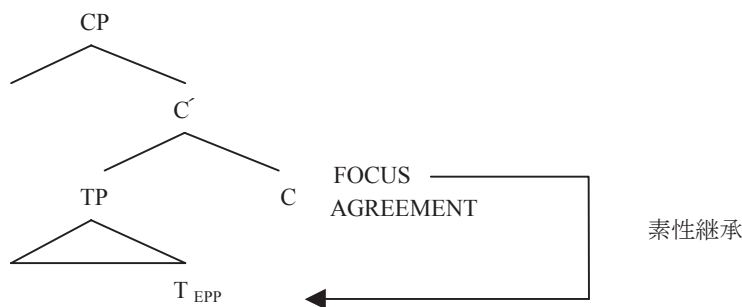
- (6) In the absence of compelling evidence to the contrary, assume languages to be uniform, with variety restricted to easily detectable properties of utterances. (Chomsky (2001: 2))

Miyagawaはこの原理に基づいて、TのEPP素性に関する特性を(7)のように仮定している。

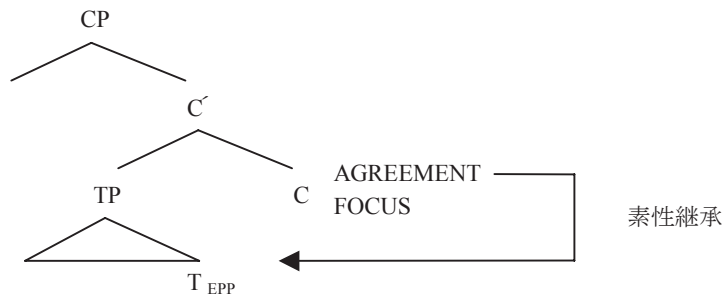
- (7) a. Tは普遍的にEPP素性をもつ。
 b. EPP素性は一致素性または焦点素性ととも機能する。
 c. 一致素性と焦点素性はともにCに存在する。

EPPに関する言語間の違いは、CからTに浸透する素性の違いとして捉えられる。日本語は焦点素性がCからTに浸透してEPP素性を機能させるのに対し、英語は一致素性がCからTに浸透してEPP素性を機能させる。表面上どちらの素性が顕著に現れるかによって、言語を焦点卓越型言語と一致卓越型言語の2つのタイプに分類することができる。

- (8) 焦点卓越型言語：日本語・中国語など



- (9) 一致卓越型言語：英語・フランス語など



また、焦点卓越型言語では一致素性が、一致卓越型言語では焦点素性がそれぞれCに残り、随意的にCP指定部への移動を引き起こす。

では、焦点卓越型言語である日本語においてEPP素性がどのように働くかを、具体例によって見ていこう。その際に考慮しなければならないのは、焦点には情報の焦点 (informational focus) と同定の焦点 (identificational focus) の2種類があるという点である。情報の焦点が「主題—題述」の文構造から得られるのに対し、同定の焦点には通例強勢が置かれ、網羅的同定 (exhaustive identification) の解釈が与えられる。

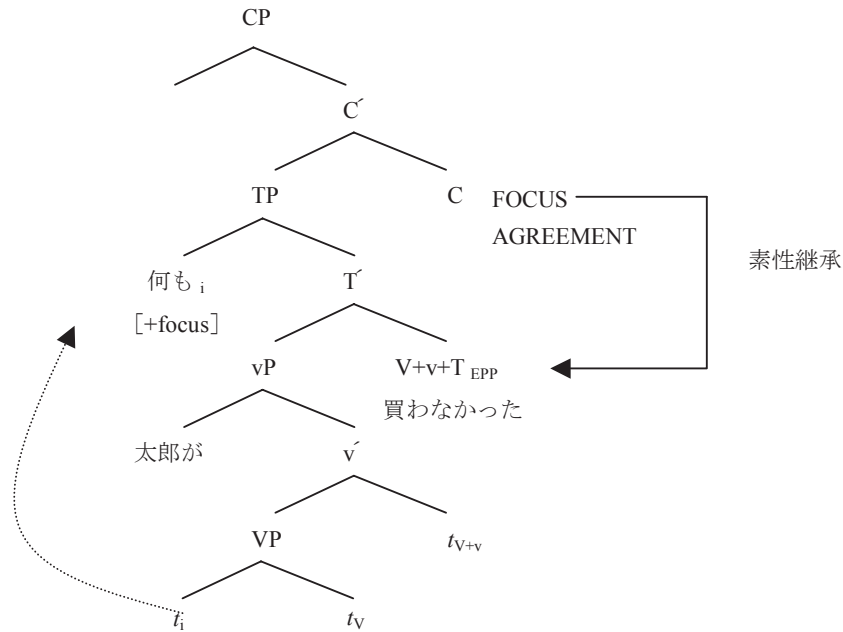
- (10) a. Informational focus: what is not presupposed in a topic-focus (theme-rheme) structure.
 b. Identificational focus: expresses exhaustive identification.

(cf. É. Kiss (1998); cited from Miyagawa (2005: 208))

まず同定の焦点から考えてみよう。下の(11)は不定代名詞「何も」が現れた構文である。この場合、「何も」には義務的に焦点が当たる。その派生は(12)のように示される。

(11) 何も太郎が買わなかった。

(12)



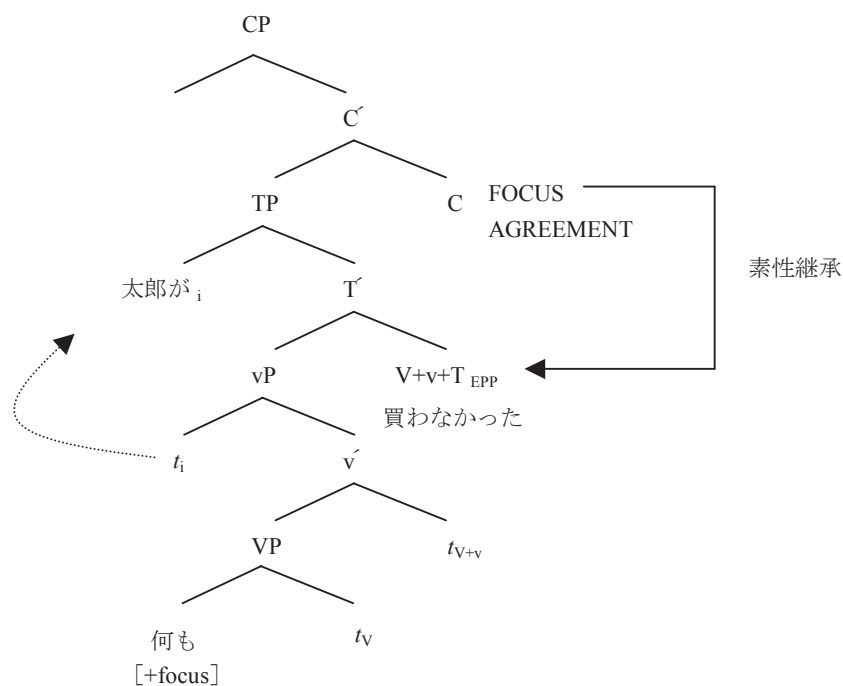
日本語は焦点卓越型言語なので焦点素性がCからTに浸透する。(12)の場合、焦点素性とEPP素性が同じ対象「何も」に対して機能する。すなわち、Tにある焦点素性はそのc統御領域内で焦点素性を持つ句を探し、VP内の名詞句「何も」の素性と一致する。そして、TのEPP素性を満たすため「何も」はTP指定部に移動する。

しかし、同定焦点の当たる要素が常にTP指定部に移動するとは限らない。日本語では(13)のような文も完全に文法的である。

(13) 太郎が何も買わなかった。

この場合も、焦点素性はCからTに浸透する。しかしMiyagawaによれば、(13)では焦点素性とEPP素性の照合が別個の要素によって行われる。まずTの焦点素性はそのc統御領域内で焦点素性を持つ句を探し、VP内の名詞句「何も」の焦点素性と一致する。しかし「何も」はそのままVP内にとどまり、TのEPP素性はvP内の主語「太郎」がTP指定部に移動することによって満たされる。「太郎」が「何も」よりもTP指定部に近いことから、移動の局所性に関して問題は生じない。

(14)



つまり、日本語ではTのEPP素性は焦点素性と連動して機能するが、その相手は必ずしも同一の要素である必要はないということである。

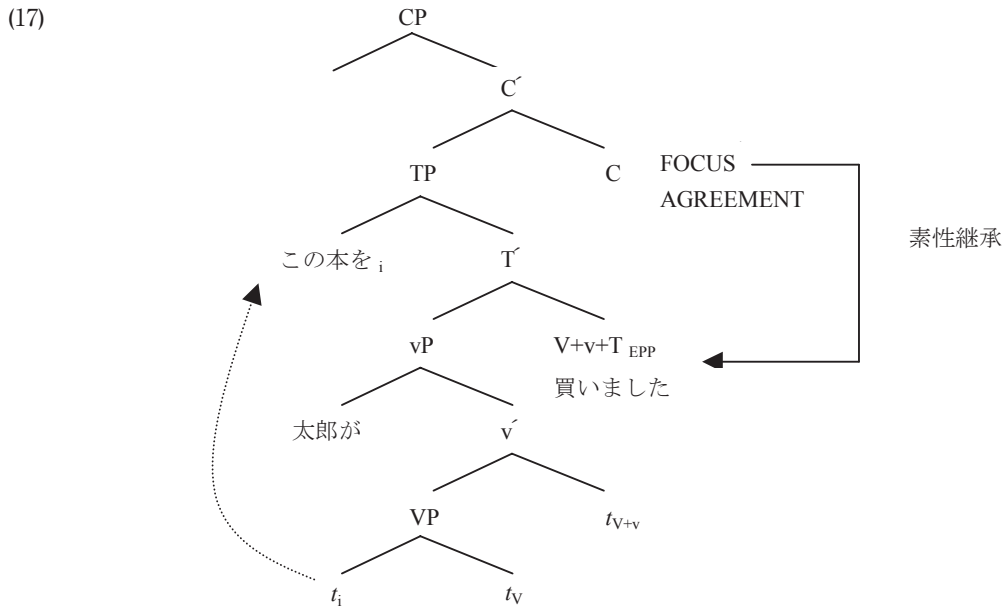
もちろん、全ての日本語の文に同定焦点を持つ句があるわけではない。(15) のように文中に同定焦点がない場合は、情報の焦点を含む文として解釈される。

(15) この本を太郎が買いました。

情報焦点構文は、その中に焦点素性を持つ句を含まない。しかし、日本語では必ず何かを TP 指定部に引き上げて EPP 素性を満たさなければならない。そこで Miyagawa は (16) に示したように、焦点素性を持つ句が文中にない場合には、T の焦点素性は文中の任意の句とある種の一致をし、同時にその句を TP 指定部に引き上げて EPP 素性を満たすと論じている。この場合、当該の句は焦点ではなく「話題」として解釈される。関連する派生は (17) のように表される。¹⁾

(16) a. [I]n the absence of an identificationally focused category, some sort of agreement takes place between focus and a category within TP. The agreed-with phrase raises to the Spec of TP to satisfy the EPP on T.
 b. [T]he raised category is *not* focused; it is the *unfocused* portion of the informational focus structure.

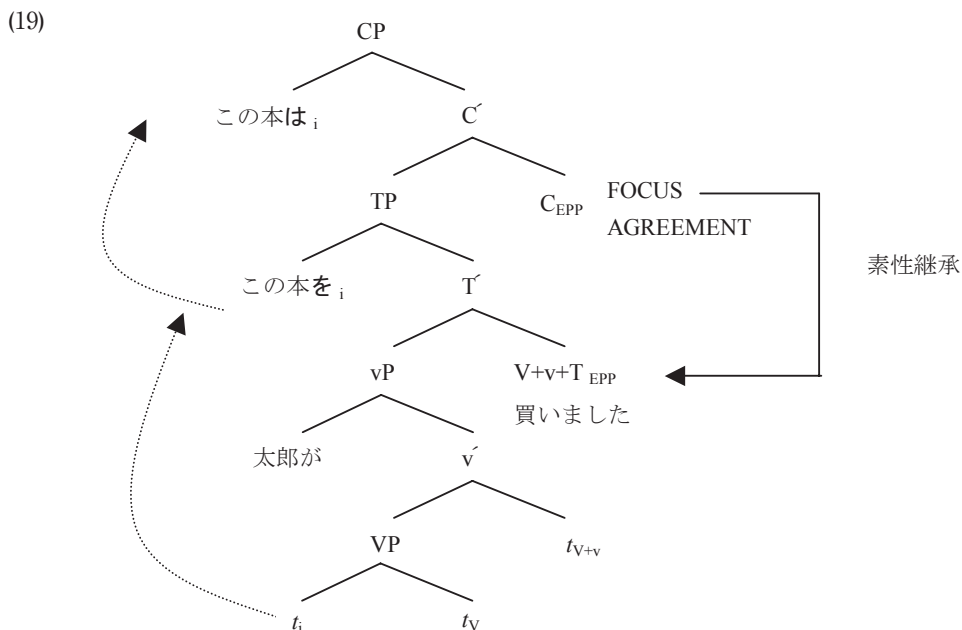
(Miyagawa (2005: 214))



本稿で関係するのは文頭が話題要素で占められる場合であるため、以下の議論では、当該の素性を焦点/話題素性と呼ぶ。

最後に、日本語では C に一致素性が留まっていることを思い起こしてほしい。先ほど述べた均一性原理が正しければ、日本語でも何らかの形でこの素性が機能しているはずである。この点に関して、Miyagawa は (18) の例に見られる日本語の「は」が C の一致素性の具現形であり、その派生が (19) のように表されると論じている。

(18) この本は太郎が買いました。



派生の語彙配列に C の EPP 素性と一致素性が含まれている場合には、C の一致素性が探査要素となり、T の EPP 素性を満たすために TP 指定部に引き上げられた要素をさらに CP 指定部に引き上げる。そして、一致の効果は「は」として音声的に具現化される。したがって「は」で標示される要素は、その前に必ず TP 指定部を経由していることになる。

4. 調査

4.1. 仮説

前節での理論的仮定が与えられると、JLE は一致素性が T に浸透することと、焦点/話題素性が T に浸透しないことの両方を習得する必要がある。一致素性の浸透は、焦点としても話題としても解釈されない主語、すなわち虚辞の *there* や *it* が英語に存在するため、肯定的証拠に基づいて容易に習得することができるのに対し、焦点/話題素性の除去は日本語の特性を取り除く操作であることから、習得が困難であると予想される (Schwartz & Sprouse (1994))。したがって「JLE による主語パラメターの再設定は可能か」という問いに対しては、「一致素性の浸透の習得は容易だが、焦点/話題要素の T からの除去は困難であるため、目標言語である英語と同一のパラメーター値に到達しないことがある」というのが本稿の立場である。これは、JLE による主語パラメターの再設定が可能という Wakabayashi の分析と、JLE が習得したように見える英語の主語は日本語の話題が転移したものであるという Kuribara の洞察をともに取り入れた案である。

4.2. 被験者

今回の調査では、英語学習の初期段階でパラメターの再設定が行われるのかどうかを検証するため、被験者を中学生に設定した。鳥取県内の公立中学校 2 校の協力を得て、それぞれ 1 回、計 2 回にわたって調査を行った。被験者の数は、第 1 回が A 中学校の 2 年生 125 名と 3 年生 128 名の計 253 名であり、第 2 回が B 中学校の 2 年生 190 名と 3 年生 230 名の計 420 名である。2 回の調査を合わせた被験者の総数は 673 名である。調査の時期は第 1 回調査が 2007 年 7 月、第 2 回調査がその翌年の 2 月である。

(20) 被験者の学年および人数 (単位人)

	2 年生	3 年生	合計
第 1 回調査 A 中学校	125	128	253
第 2 回調査 B 中学校	190	230	420
合計	315	358	673

なお、A 中学校と B 中学校は同じ市内にある公立中学校であるが、両校の間には幾分かの学力差があり、いわゆる学力テストでは B 中学校の生徒の方が良好な成績を収める傾向がある。このことが JLE の主語パラメーター再設定に及ぼす影響については、4.4 節で考察する。

4.3. 調査方法と項目

調査の方法は、第 1 回、第 2 回ともに筆記による文法性判断テストである。与えられた英文について、正しい・たぶん正しい・たぶん正しくない・正しくない、の 4 つの選択肢のうちから 1 つを選び、丸で囲むように指示を与えた。調査は中学校の英語の時間を使って、学級ごとに行われた。²⁾

調査項目に関しては、Kuribara (2004) で使用されている構文を参考にしながら、3 種類の刺激文を用意した。第 1 のグループは日本語で容認される話題主語構文を逐語的に英語に置き換えた非文である。これを A タイプと呼ぶことにする。この中には、(21a-c) のような時を表す DP/PP が文頭に生じた空主語構文、(21d) のような θ 標示されない DP が文頭に生じた空主語構文、(21e) のような θ 標示された DP が文頭に生じた空主語構文が含まれる。

(21) **A タイプ**: 日本語でのみ容認される話題主語構文

- a. *This morning e ate cereal. (今朝はシリアルを食べました)
- b. *Last Sunday e rained hard. (先週の日曜日は雨が降りました)
- c. *Ten years ago e was a school here. (10 年前はここに学校がありました)
- d. *The lunch e made salad. (お昼ごはんはサラダを作りました)
- e. *The car e has to drive carefully. (車は注意深く運転しなければなりません)

第 1 回調査: 2 年生 11 トークン; 3 年生 14 トークン

第 2 回調査: 2 年生 11 トークン; 3 年生 14 トークン

2 年生でトークン数が少ないのは、第 1 回調査の段階で *there* 構文が未修であったため、(21c) のような *there* 主語が省略されている刺激文を含めなかったためである。また、第 1 回調査と第 2 回調査でトークン数は同じであるが、用いられている例文は同一ではない。

第 2 のグループは、日本語と英語でともに容認される論理的主語構文である。これを B タイプと呼ぶことにする。用例サンプルと各回のトークン数を (22) に挙げる。

- (22) **Bタイプ**：日英語でともに容認される論理的主語構文
 a. Sunday comes after Saturday. (日曜日は土曜日のつぎに来る)
 b. My father bought a new car. (私のお父さんは新しい車を買いました)
 第1回調査：2年生3トークン；3年生3トークン
 第2回調査：2年生6トークン；3年生6トークン

ここには (22a) のように時を表す DP が主語として現れている構文と、(22b) のように指示的 DP が主語として現れている構文が含まれる。

第3のグループは、英語でのみ容認される虚辞主語構文である。これを C タイプと呼ぶことにする。用例サンプルと各回のトークン数を (23) に挙げる。

- (23) **Cタイプ**：英語でのみ容認される虚辞主語構文
 a. It is raining now. (今、雨が降っている)
 b. There are three books on my desk. (私の机の上に本が3冊ある)
 第1回調査：2年生1トークン；3年生3トークン
 第2回調査：2年生3トークン；3年生7トークン

ここには (23a) のような天候の it を含む構文と、(23b) のような there 構文が含まれる。第1回調査時の2年生で there 構文が未修であったため、2年生の方でトークン数が少なくなっている。

4.4. 結果

4.4.1. 全体的結果

では、まず上記の刺激文のタイプごとの解答パターンを見てみよう。(24) は第1回調査における「正しい・たぶん正しい」の解答率と「正しくない・たぶん正しくない」の解答率を A・B・C のタイプごとに求めたものである。A タイプは英語では非文、B タイプと C タイプは正文であるため、表の網掛け部分が正答ということになる。

(24) 第1回調査：タイプごとの解答パターン (単位%；網掛け部分が正答)

	タイプ	(たぶん) 正しい	(たぶん) 正しくない
2年生	A	63	34
	B	65	33
	C	77	22
3年生	A	64	34
	B	86	12
	C	84	14

いずれのタイプでも「正しい・たぶん正しい」の解答率が「正しくない・たぶん正しくない」の解答率を上回っている。また、2年生と3年生を比較すると、3年生では正答率（すなわち、網掛け部分の解答率）が上昇していることが分かる。次に、第2回調査の結果をまとめたのが (25) である。

(25) 第2回調査：タイプごとの解答パターン (単位%；網掛け部分が正答)

	タイプ	(たぶん) 正しい	(たぶん) 正しくない
2年生	A	44	56
	B	76	23
	C	78	22
3年生	A	41	59
	B	78	22
	C	84	15

第1回調査と同様に、いずれのタイプでも2年生に比べて3年生では正答率が上昇している。ただし第1回と異なるのは、いずれの学年でもタイプAの正答率（「正しくない・たぶん正しくない」を選択した割合）が誤答率（「正しい・たぶん正しい」を選択した割合）を上回っている点である。これは、第1回と第2回の調査における母集団の平均的な学力差を反映したものであると考えられる。よって、それぞれの調査の全体的解答パターンから分かる事実をまとめると次のようになる。

- (26) a. 学年が上がるにつれて正答率が上昇する。
 b. 母集団の平均的な学力差が正答率に反映される。
 c. 英語でのみ容認される虚辞主語構文を容認することは容易である。
 d. 日本語でのみ容認される話題主語構文を排除することは困難である。

このうち (26a, b) は、学習初期段階にある JLE の中間言語文法において、義務的主語の習得に関して何らかの変化が生じていることを示している。また (26c, d) は、その変化がすべての構文タイプで同じように進行するのではなく、義務的主語の習得が容易である構文と難しい構文があることを示している。

注意しなければならないのは、いずれの調査でも被験者は英語特有の虚辞主語構文を高い割合で正しく容認しているが、文頭に話題要素が現れ、かつ顕在的な虚辞が現れない構文を正しく排除するのは困難であるという点である。第1回および第2回の調査で用いた A タイプの刺激文のうち「文頭話題要素一空の虚辞主語構文」を取り出して解答パターンを示すと (27) のようになる。

(27) 「文頭話題要素一空の虚辞主語構文」の解答パターン (単位 % ; 網掛け部分が正答)

	学年	(たぶん) 正しい	(たぶん) 正しくない
第1回調査	2年生	65	33
	3年生	71	29
第2回調査	2年生	54	46
	3年生	48	53

いずれの調査、学年とも、解答パターンは A タイプ全体の傾向とほぼ一致する。したがって、被験者の多くは、顕在的な虚辞主語の有無に関わらず刺激文を容認するような中間言語文法を持つのではないかと予想される。このことを調査するため、次に被験者個人レベルでの解答パターンを分析する。

4.4.2. 個別的結果

前節で概観した Miyagawa (2005) の理論的枠組みが与えられると、T には焦点 / 話題素性が一致素性が C から浸透し、T の EPP 素性を機能させなければならない。日本語は焦点 / 話題素性が浸透する言語であり、英語は一致素性が浸透する言語である。ここで、焦点 / 話題素性または一致素性が浸透する文法が UG の選択肢として利用可能であり、かつ JLE の中間言語文法が UG に規定されているとするならば、JLE の中間言語がもちうるパラメータ値には都合3つの選択肢があることになる。それぞれのパラメータ値と、それが今回の調査で使用した刺激文に対してどのように反応するかをまとめたのが (28) である。網掛け部分が、英語の刺激文に対して正しく反応している箇所である。

(28) 中間言語がもちうるパラメータ値とその解答パターン (網掛け部分が正答)

パラメータ値	刺激文への反応		
	A	B	C
焦点/話題素性が T に浸透 (日本語型)	ok	ok	*
焦点/話題素性または一致素性が T に浸透 (日英中間型)	ok	ok	ok
一致素性が T に浸透 (英語型)	*	ok	ok

焦点 / 話題素性が T に浸透する日本語型パラメータを持つ話者は、日本語でのみ容認される話題主語構文 (A タイプ) および日英語でともに容認される論理的主語構文 (B タイプ) を容認する。しかし、英語の虚辞は話題として解釈されないため、C タイプを非文と判断するはずである。逆に、一致素性が T に浸透する英語型パラメータを持つ話者は、A タイプを排除し、その他の構文を容認するはずである。また、焦点 / 話題素性または一致素性が T に浸透する日英中間型パラメータを持つ話者は、すべてのタイプの構文を容認すると予想される。

今回の被験者がどのパラメータ値を持つのかを明らかにするため、A・B・C 各タイプの刺激文に一貫した解答傾向を示した被験者を抽出し、その人数と母集団に占める割合を調査した。ここで「一貫した解答傾向を示す」とは、それぞれの刺激文タイプに関して、3分の2以上の割合で「正しい・たぶん正しい」または「正しくない・たぶん正しくない」の解答を選択したという意味である。その結果を示したのが (29) である。

(29) 一貫した解答パターンを示した被験者数とその母集団内での割合 (単位人 ; %)

刺激文への反応			第1回調査				第2回調査			
A	B	C	2年生		3年生		2年生		3年生	
ok	ok	*	8人	6%	1人	0.6%	3人	2%	0人	0%
ok	ok	ok	45人	36%	72人	44%	21人	16%	26人	13%
*	ok	ok	2人	2%	11人	7%	37人	29%	65人	31%

第1回調査では、焦点 / 話題素性または一致素性が T に浸透する日英中間型パラメータ (2行目) を示す被験者が最も多く、第2回調査では一致素性のみが T に浸透する英語型パラメータ (3行目) を示す被験者が最も多い。焦点 / 話題素性のみが T に浸透する日本語型パラメータ (1行目) を示す被験者は第1回目、第2回とも多くない。また2年生から3年生への推移を見てみると、第1回調査、第2回調査ともに、日本語型パラメータを示す話者は減少し、日英中間型パラメータと英語型パラメータを示す話者は増加していることが分かる。

なお、予想されるパターン以外に一貫した解答の傾向を示す話者がいるかどうかについても同様の調査をした。その結果を示したのが (30) である。

(30) 一貫した解答パターンを示した被験者数とその母集団内での割合 (単位人; %)

刺激文への反応			第1回調査				第2回調査			
A	B	C	2年生		3年生		2年生		3年生	
ok	*	ok	9人	7.2%	0人	0%	1人	0.6%	1人	0.5%
ok	*	*	3人	2.4%	1人	0.8%	0人	0%	0人	0%
*	ok	*	0人	0%	0人	0%	0人	0%	0人	0%
*	*	ok	2人	1.6%	0人	0%	0人	0%	1人	0.5%
*	*	*	2人	1.6%	1人	0.8%	0人	0%	0人	0%

1行目のパターンだけ、第1回調査の2年生で9人という比較的高い数字が出ている。これはおそらく、このグループではBタイプの刺激文の数が少ないことが影響していると思われる。³⁾ それ以外では、一貫した解答を示した被験者はきわめて少なく、被験者の中間言語文法が本稿で仮定しているパラメーター値の範囲内に収まっていることを示している。

個別の集計結果から明らかになったことをまとめると (31) のようになる。

- (31) a. JLEの主語パラメーターは、日本語型、英語型、日英中間型のいずれかに収まる。
- b. 学習が進むにつれて、日本語型は減少し、日英中間型と英語型が増加する。
- c. 平均的学力が高い集団では、英語型の話者が日英中間型の話者よりも優勢である。

以上の結果をふまえ、最後にJLEによる主語パラメーター再設定の過程がどのように進行するのかを考察する。

4.5. 考察

本稿で仮定している理論的枠組みにしたがえば、JLEによる英語の義務的主語の習得は、TP指定部に現れる要素を話題から論理的主語へと推移させていく過程として捉えることができる。前節で得られた全体的・個別的結果は、この過程が2段階で生じることを示している。

まず、初期状態のJLEは、焦点/話題素性がTに浸透する日本語型パラメーター値を持つと思われる。このことは、上の(29)で示したように、最も初級のレベルにある第1回調査の2年生において、このパラメーター値を持つJLEが8人(6%)存在することから分かる。しかし、第1回調査、第2回調査とも、日本語型パラメーター値を持つJLEが2年生の時点ですでに多くなく、また学年が上がると減少していることから、学習者は比較的早い時期に次の段階へと進むことが分かる。それが、焦点/話題素性または一致素性がTに浸透する日英中間型パラメーターの中間言語文法である。この変化を示したのが(32)である。

$$(32) \quad [{}_{CP} C [{}_{TP} \text{Topic/Focus } T_{\text{TOPIC/FOCUS}} [{}_{VP} \dots]]] \rightarrow [{}_{CP} C [{}_{TP} \text{Topic/Focus/Subject } T_{\text{TOPIC/FOCUS or AGREEMENT}} [{}_{VP} \dots]]]$$

この変化は、一致素性がTに浸透することを新たに習得することで生じる。このパラメーター再設定が比較的容易なのは、虚辞のthereやitという肯定的証拠を手がかりにすることができるためであると思われる。

次に、先ほどの(29)をもう一度見ると、第1回調査、第2回調査ともに、学年が上がると英語型パラメーターを持つ被験者が増えていることが分かる。したがって、日英中間型パラメーターから英語型パラメーターへという、もうひとつの推移が生じていることが分かる。この変化を表したのが(33)である。

$$(33) \quad [{}_{CP} C [{}_{TP} \text{Topic/Focus/Subject } T_{\text{TOPIC/FOCUS or AGREEMENT}} [{}_{VP} \dots]]] \rightarrow [{}_{CP} C [{}_{TP} \text{Subject } T_{\text{AGREEMENT}} [{}_{VP} \dots]]]$$

英語型パラメーターを持つ被験者の割合が、第1回調査よりも平均的学力の高い母集団を対象とした第2回調査でより多く観察されたことから、(32)の第一次変化と(33)の第二次変化の間にはある程度の時間差があり、後者の変化を習得するのがより困難であることが分かる。これには2つの理由があると思われる。ひとつは、第一次変化と異なり、第二次変化ではインプットからの肯定的証拠を得ることができないということである。もうひとつの理由は、第一次変化がTに新たな特性を加える操作であるのに対し、第二次変化は日本語の特性を取り除く、より難しい操作であるということである。問題は、この再設定に成功した被験者が何を手がかりとしたのかという点であるが、一般的な学力差との相関関係が認められることから、教室における明示的な文法指導(例えば「主語は動詞で表される行為の動作主でなければならない」といった類の指導)によって再設定が行われているのかもしれない。この点については、今後さらなる調査が必要である。

いずれにせよ、JLEが第二次変化を経た時点で、英語の義務的主語が正しく習得されたことになる。日本語型パラメーター、あるいは日英中間型パラメーターを持つ間は、TP指定部に動詞の外項ではない要素が焦点または話題要素として現れることができ、その場合には外項がproとしてvP指定部に生じることが許される。しかし、いったん英語型パラメーターへの再設定が行われると、TP指定部には動詞との一致を認可するために外項(ただし受動態または非対格動詞の場合には内項)が現れなければならない。TのEPP素性が必ず音形を持つ要素によって満たされなければならないとすると、その指定部に現れる項のDPが音的に空であることは許されない。⁴⁾ よって、英語でproが存在しない、すなわち主語が必ず音的に具現化されることが習得されるのである。

5. 結語

以上、本稿では中学生を対象として、主語パラメータ再設定の可能性を検証し、その変化の過程が近年のミニマリストプログラムで提案されている素性継承理論により適切に捉えられることを論じた。JLEによる英語の義務的主語の習得は、TP指定部に現れる要素を話題から論理的主語へと推移させていく過程であり、一致素性がTに浸透することを習得するパラメータ再設定と、焦点/話題素性がTに浸透しないことを習得する再設定の2段階からなる。前者は肯定的証拠が利用できるため再設定が容易であるが、後者は肯定的証拠がなく、日本語の特性を取り除く操作であるため、再設定は（不可能ではないが）困難である。

注

- * 本稿は、日本第二言語習得学会第8回年次大会（2008年5月31日—6月1日、於京都外国語大学）における口頭発表原稿に修正を加えたものである。
- 1) よって、Miyagawaの理論ではかきまぜはEPP素性によって誘引されるTP指定部への移動ということになる。もちろん、同じ場所には動詞の外項としての主語も生じることができ、その場合には主語が話題として解釈される。
 - 2) 調査の際には各クラスを任意で2つのグループに分け、一方のグループには英文のみの問題を渡し、他方のグループには英文とともに日本語訳を示した問題を渡した。しかしながら、日本語訳の有無は結果に大きな影響を及ぼさなかったため、以下の議論では両者をまとめた集計結果のみを提示する。
 - 3) 当該のグループに与えられたBタイプの刺激文は“Sunday comes after Saturday.” “Winter comes early in Hokkaido.” “My father bought a new car.”の3例である。これらのうち、はじめの2例の正答率が最後の例に比べて著しく低いことが、Bタイプを一貫して（すなわち3分の2以上の割合で）排除する被験者が多く算出された理由であると思われる。これは、例えば曜日や季節の単語が正しく理解されていなかったことが原因かもしれない。もしそうであるならば、ここで問題となっている反応パターンはこれら9人の被験者の中間言語文法を直接反映したものではないということになり、彼らの存在は必ずしも本稿の主張を覆す反例とはならない。
 - 4) 日本語では「今朝、朝ごはんを食べましたか」という問いに「食べました」と答えられることから分かるように、動詞が文頭に生じる文が許される。この種の構文がMiyagawa (2005)の枠組みでどのように扱われるのかは、実のところははっきりしない。ひとつの可能性は、明示的なDP主語がTP指定部に移動してEPP素性を満たし、その後削除されるというものである。なお、今回の調査項目には“‘Studied English.’”のような定形動詞で文が始まる構文も含まれていたが、分析の枠組みがはっきりしないため、調査の集計からは除外した。この種の日本語の構文がJLEのパラメータ再設定にどのような影響を与えるのかについては、今後の課題である。

参考文献

- Chomsky, N. (1981). *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2000). Minimalist inquiries: The framework. In R. Martin, D. Michaels & J. Uriagereka (eds.), *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2001). Derivation by phase. In M. Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, N. (2005). On phases. ms., MIT.
- Chomsky, N. (2006). Approaching UG from below. ms., MIT.
- É. Kiss, K. (1998). Identificational focus versus informational focus. *Language* 74, 245-273.
- Hirakawa, M. (2003). Unaccusatives versus passives in L2 English. In S. Wakabayashi (ed.), *Generative Approaches to the Acquisition of English by Native Speakers of Japanese*, 41-78. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Kuribara, C. (2004). Misanalysis of subjects in Japanese-English interlanguage. *Second Language* 3, 69-95.
- Miyagawa, S. (2005). On the EPP. In M. McGinnis and N. Richards (eds.), *Perspectives on Phases* (MIT Working Papers in Linguistics 49), 201-235. Cambridge, MA: MITWPL.
- Schwartz, B. D. & Sprouse, R. A. (1994). Word order and nominative case in non-native language acquisition: A longitudinal study of (L1 Turkish) German interlanguage. In T. Hoekstra & B. D. Schwartz (eds.), *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, 317-368. Amsterdam: John Benjamins.
- Sigurðsson, H. Á. (2003). Meaningful silence, meaningless sounds. ms., Lund University.
- Wakabayashi, S. (2002). The acquisition of non-null subjects in English: A minimalist account. *Second Language Research* 18, 28-71.
- Wakabayashi, S. & Negishi, R. (2003). Asymmetry of subjects and objects in Japanese speakers' L2 English. *Second Language* 2, 53-73.